

『野球規則を正しく理解するための野球審判員マニュアルー規則適用上の解釈についてー第5版』

2026 年修正一覧

ページ	現 行	修 正	備 考		
23	1 1845 年に初の野球規則が誕生	1 1845 年に初の野球規則が誕生 表の末尾に次の表を追加する。 <table><tr><td>2026</td><td> ● OBR において、内野手の守備の制限（いわゆる極端な内野手の守備シフトの禁止）に関する規定について、ペナルティの変更があり、打者が安打、失策、四球、死球、その他で 1 塁に達した場合を除き、違反した内野手が投球後に最初に触れた場合、打者はアウトにされるおそれなく 1 塁が与えられ、その他の内野手の場合、ボールが宣告されることとなった。 ただし、我が国では内野手の守備制限に関する内容は適用しないこととなっている。 ● 2017 年の OBR 規則改正により OBR で掲載されているいわゆるハイブリッドポジション（セットポジションとみなされる姿勢からワインドアップポジションで投球する）について、これまで様々な経緯から公認野球規則では適用をしていなかったが、世界標準の投球動作であることから適用することとした。 ● ハイブリッドポジションの適用に伴い、アマチュア野球内規③” ワインドアップポジションの投手” の項を削除するとともに、同内規⑬” 正式試合となる回数” についても公認野球規則に明記をされていることから整理を行い削除した。 ● 複数イニングの登板となる投手が、イニングの初めに登板する際、ファウルラインを超えてしまえば、その後に代打者が告げられたとしてもそのときの第一打者を完了しなければならない </td></tr></table>	2026	● OBR において、内野手の守備の制限（いわゆる極端な内野手の守備シフトの禁止）に関する規定について、ペナルティの変更があり、打者が安打、失策、四球、死球、その他で 1 塁に達した場合を除き、違反した内野手が投球後に最初に触れた場合、打者はアウトにされるおそれなく 1 塁が与えられ、その他の内野手の場合、ボールが宣告されることとなった。 ただし、我が国では内野手の守備制限に関する内容は適用しないこととなっている。 ● 2017 年の OBR 規則改正により OBR で掲載されているいわゆるハイブリッドポジション（セットポジションとみなされる姿勢からワインドアップポジションで投球する）について、これまで様々な経緯から公認野球規則では適用をしていなかったが、世界標準の投球動作であることから適用することとした。 ● ハイブリッドポジションの適用に伴い、アマチュア野球内規③” ワインドアップポジションの投手” の項を削除するとともに、同内規⑬” 正式試合となる回数” についても公認野球規則に明記をされていることから整理を行い削除した。 ● 複数イニングの登板となる投手が、イニングの初めに登板する際、ファウルラインを超えてしまえば、その後に代打者が告げられたとしてもそのときの第一打者を完了しなければならない	2026 規則改正
2026	● OBR において、内野手の守備の制限（いわゆる極端な内野手の守備シフトの禁止）に関する規定について、ペナルティの変更があり、打者が安打、失策、四球、死球、その他で 1 塁に達した場合を除き、違反した内野手が投球後に最初に触れた場合、打者はアウトにされるおそれなく 1 塁が与えられ、その他の内野手の場合、ボールが宣告されることとなった。 ただし、我が国では内野手の守備制限に関する内容は適用しないこととなっている。 ● 2017 年の OBR 規則改正により OBR で掲載されているいわゆるハイブリッドポジション（セットポジションとみなされる姿勢からワインドアップポジションで投球する）について、これまで様々な経緯から公認野球規則では適用をしていなかったが、世界標準の投球動作であることから適用することとした。 ● ハイブリッドポジションの適用に伴い、アマチュア野球内規③” ワインドアップポジションの投手” の項を削除するとともに、同内規⑬” 正式試合となる回数” についても公認野球規則に明記をされていることから整理を行い削除した。 ● 複数イニングの登板となる投手が、イニングの初めに登板する際、ファウルラインを超えてしまえば、その後に代打者が告げられたとしてもそのときの第一打者を完了しなければならない				

		いこととした。 ● 最終回の裏、満塁で打者が四球を得たので決勝点が記録されるような場合、打者走者または三塁走者が進塁に際して塁に触れ損ねたとき、守備側のアピールがあったときだけにアウトを宣告することとした。 塁に触れて反転したフェアボールに、走者がファウル地域で触れた場合もフェア地域で触れたと同様、ボールデッドとしてアウトが宣告されることとした。 ● 試合が天候、競技場の状態によって中断された場合、天候状況によって続行が不可能と判断できれば、所定の30分を経過しなくても試合を打ち切れることとした。 ● 監督が投手のもとに行った際、投手が試合から退かずにそのまま他の守備位置についた場合でも、その投手のもとへ1度行ったものとしてカウントすることとした。	
31	8 着色バット “赤褐色”の着色バットについて、プロ野球では2019年からは「仕上がったときの表面の色がパントーンカラー・コート（1665c）に限りなく近いこと」としているが、アマチュア野球ではあくまで「赤褐色系」とし、現行のまま規制をかけないこととしている。	8 着色バット 本文を次のとおり修正する。 “赤褐色”の着色バットについて、プロ野球では2019年からは「仕上がったときの表面の色がパントーンカラー・コート（1665c）に限りなく近いこと」としているが、アマチュア野球ではあくまで「赤褐色系」とし、現行のまま規制をかけないこととしている。 また、同系色の濃淡については、”異なる色である”として、許可されている色同士の2色との解釈となることから、2025年アマチュア野球規則委員会において確認された。	2026 修正
32	10 投手用のグラブ	10 投手用のグラブ	

	表の[縁取り]の[社会人・大学・軟式] 特に規定なし	表の[縁取り]の[社会人・大学・軟式]をつぎのとおり修正する。 特に規定なし [軟式] 制限なし	
35	12 野手のグラブの色 2014 年より規則 3.07(a)の後段は、次のように改正になり、野手のグラブの色についても制限が加えられるようになった。 規則 3.07 (a) (前段省略) 守備位置に関係なく、野手はPANTONEの色基準 14 番よりうすい色のグラブを使用することはできない。 [注] アマチュア野球では、所属する連盟、協会の規定に従う。 ～中略～ 野手のグラブにまで色の規制が加わったのは、たとえば外野手が前進してラインドライブを地面すれすれでキャッチしようとしたとき、グラブの色とボールの色とが同じだとダイレクトキャッチだったのか、ショートバウンドだったのか、ショートバウンドだったのか、	12 野手のグラブの色 本文を次のとおり修正する。 2014 年より規則 3.07(a)の後段は、次のように改正になり、野手のグラブの色についても制限が加えられるようになった。 規則 3.07 (a) (前段省略) 守備位置に関係なく、野手はPANTONEの色基準 14 番よりうすい色のグラブを使用することはできない。 [注] アマチュア野球では、所属する連盟、協会の規定に従う。 ～中略～ 野手のグラブにまで色の規制が加わったのは、たとえば外野手が前進してラインドライブを地面すれすれでキャッチしようとしたとき、グラブの色とボールの色とが同じだとダイレクトキャッチだったのか、ショートバウンドだったのか判別が難しいケースがあるとの理由からである。確かに審判員にとってキャッチ、ノーキャッチの判定はトラブルボールと言って難しい判定の一つである。 なお、10 投手用のグラブでも記載をしているとおり、投手用に限らず野手用も含めグラブの規定については、所属団体によりことなり、時勢時節によっても変化することから、シーズンインのときをはじめ、都度確認を行って欲しい。野手には捕手も含む。また、ツートンカラーのグラブの使用は認められるが、その場合でも規定に合致する色同士の 2 色でなければならない。 また、この規則は硬式用グラブ全体に適用されるが、アマチュア野球ではその	2026 修正

	のか判別が難しいケースがあるとの理由からである。確かに審判員にとってキャッチ、ノーキャッチの判定はトラブルボールと言って難しい判定の一つである。 なお、野手には捕手も含む。また、ツートンカラーのグラブの使用は認められるが、その場合でも規定に合致する色同士の2色でなければならない。 また、この規則は硬式用グラブ全体に適用されるが、アマチュア野球ではその影響が大きすぎることから、アマ[注]を挿入して、各団体の規定に従うこととした。社会人、大学は引き続き2015年および2016年の2年間を猶予期間としたが、2017年から適用している。また、高校野球では2015年から投手、野手を問わず使用するグラブについて「本体カラーは、ブラウン系、オレンジ系、ブラック」となっている。そして、軟式はこの規則を適用せず、従来通りの対応となっている。	影響が大きすぎることから、アマ[注]を挿入して、各団体の規定に従うこととした。社会人、大学は引き続き2015年および2016年の2年間を猶予期間としたが、2017年から適用している。また、高校野球では2015年から投手、野手を問わず使用するグラブについて「本体カラーは、ブラウン系、オレンジ系、ブラック」となっている。そして、軟式はこの規則を適用せず、従来通りの対応となっている。	
99～103	53 指名打者 (Designated Hitter)	54 指名打者 (Designated Hitter) 本文を次のとおり修正する。	2026 修正

例題にて確認をしたい。 先発投手：A、5番DH：A、救援投手：B、代打者：C、7番レフト：D ※例題にあつては、条件としてAは投手として第1打者への投球、DHとしては1打席を既に完了しているものとする。 例題7：投手Aに代わり救援投手Bが登板した。 ——Aは投手としては試合から退いたが、DHとしてはそのまま出場できる。(5.11(b)) 打順：5番DH：Aは継続、救援投手：B ～中略～ 例題14：攻守交代時に監督から、投手と指名打者を兼ねるAが指名打者を解除させて、そのまま指名打者の打順で投手としても継続させたいと球審に申し出があった。この申し出は認められるか。(打順表には守備位置のところがDHではなく、「1（投手）」とする) ——認められない。Aが先発投手として投げ続けている場合、指名打者を解除することはできない。	例題にて確認をしたい。 先発投手：A、5番DH：A、救援投手：B、代打者：C、7番レフト：D ※例題にあつては、条件としてAは投手として第1打者への投球、DHとしては1打席を既に完了しているものとする。 例題7：投手Aに代わり救援投手Bが登板した。 ——Aは投手としては試合から退いたが、DHとしてはそのまま出場できる。(5.11(b)) 打順：5番DH：Aは継続、救援投手：B ～中略～ 例題14：攻守交代時に監督から、投手と指名打者を兼ねるAが指名打者を解除させて、そのまま指名打者の打順で投手としても継続させたいと球審に申し出があった。この申し出は認められるか。(打順表には守備位置のところがDHではなく、「1（投手）」とする) ——認められない。Aが先発投手として投げ続けている場合、指名打者を解除することはできない。(Aが形式上、指名打者を退いたことになり、再び打者として打席に立つことはできない) (5.11(b)) では、投手と指名打者を兼ねるAがまだ第1打席に立っていない状態（例えば、1回表の攻撃側をなかなか抑えることができない）のとき、この投手は降板することができるであろうか。以下の2つの事例を上げてみた。 例題15：1回表で先発登板しているA投手（指名打者を兼務）が乱調のため、守備側の監督が球審に右翼手の守備についていたBを投手にAを右翼手に移動させたい	
--	---	--

(Aが形式上、指名打者を退いたことになり、再び打者として打席に立つことはできない) (5.11(b))

と通告があった。この交代は認められるか。

—認められる。

この交代によって指名打者が消滅することとなり、例えば、この1回表の途中で右翼手についたAが試合から退くことも可能である。

打順	1	2	3	4	5	6	7	8	9	P
位置	DH						R F			
選手名	A						B			A

1回表の守備（投手）でAが乱調

投手：A ⇔ 右翼手：B

↓

打順	1	2	3	4	5	6	7	8	9
位置	R F						1		
選手名	A						B		

<A>は再び『投手』に戻ることはできない

1回表の守備中に、指名打者を消滅しているので<A>が試合から退いても問題ない

例題16：1回表で先発登板しているA投手（指名打者を兼務）が乱調のため、守備側の監督は球審に投手交代（Aはベンチに退いて、控え選手であるCの登板）の申し出があり、その際、指名打者を消滅させて、Cが1番の打順も受け継ぐ旨の通告があった。この交代は認められるか。

—認められる。

しかし、指名打者を消滅せずに、Cがそのまま1番の指名打者としても兼務することはできない。

打順	1	2	3	4	5	6	7	8	9	P
位置	DH						R F			
選手名	A						B			A

1 回表の守備（投手）でAが乱調

投手：A ➡ 控えのCに交代

<C>はDHおよび投手双方として出場できないため、指名打者は消滅となる。



打順	1	2	3	4	5	6	7	8	9
位置	P						R F		
選手名	C						B		

指名打者を消滅させたので、<A>は当然ながら試合に出場できない

規則 5.11(b) では『先発投手自身が打つ場合には、5.11(a)により、別々の2人として考えることができる』となっている。この選手プレイヤーがそれぞれの役割を果たさなければならない状況を整理すると、

- ・投手である役割を果たさなければならない状況（自チームが守備中である場合）→『先発投手』としての義務（5.10(f)）を完了する。
 - ・指名打者である役割を果たさなければならない状況（自チームが攻撃中である場合）→『指名打者』としての義務（5.11(a)(2)）を完了する。
- となる。－

一般的な指名打者ルール（5.11(a)：先発投手と指名打者が異なるプレイヤー）を採用したケースにおいて考えた場合、『1 回表から投手が乱調で抑えることができずに降板せざるを得なく、控え選手も少ないことから、その投手がそのまま、他の守備位置に移動することは認められる。（この時点で指名打者を消滅させることは可能であり、指名打者として出場する予定であったプレイヤーが自

		動的に退く形になったとしても問題はない) ので、 ①単に投手としては試合から退くことは問題なく(第1打者への打撃が完了)、引き続き、指名打者として試合に出場することは可能である。ただし、この場合は5.11(a)(2)の通り、まだ『指名打者』としての役割は残っていることから、『自らの第1打席を打撃完了する義務』は残ったままとなる。 ②先発投手としての義務(第1打者への打撃が完了)が果たされていれば、一般的な指名打者ルール(先発投手と指名打者が異なるプレーヤー)での対応と同様、投手と指名打者を兼ねた先発投手であっても、他の守備位置に移動することは問題ない。(ただし、5.11(a)(8)のとおり指名打者の役割は消滅する) ※言うまでもないが、5.10(f)および5.11(a)(2)における先発投手および指名打者それぞれの『義務』を果たす前であっても、当該プレーヤーが負傷または病気のために出場が不可能と球審が認めた場合、交代することは認められている。	
108	1 ワインドアップポジション ただし、アマチュア野球では、ワインドアップポジションの投手に対して、次のような制限を設けている。 ～中略～ 投手が投球動作を起こして両手を合わせた後、再び両手をふりかぶることは、投球を中断したものとみなされる。投球動作を起こしたときは、投球を完了しなければならない。(アマチュア内規③) 例題：走者満塁。投手はワインド	1 ワインドアップポジション 本文の一部を削除するとともに次のとおり修正する。 ただし、アマチュア野球では、ワインドアップポジションの投手に対して、次のような制限を設けている。 ～中略～ 投手が投球動作を起こして両手を合わせた後、再び両手をふりかぶることは、投球を中断したものとみなされる。投球動作を起こしたときは、投球を完了しなければならない。(アマチュア内規③) 例題：走者満塁。投手はワインドアップポジションをとった。	2026 アマチュア内規改正

アップポジションをとった。 打者への投球動作を起こす前に、投手が走者をアウトにとようと一連の動作で二塁（右投手の場合は三塁側に回り、左投手の場合は一塁側に回り）に（または右投手が三塁に、左投手が一塁に）振り向いて、踏み出して送球した。 一正規の動きである。（ただし、アマチュアでは、ボークとなる）。(5.07(a)(1)【原注2】②、アマチュア内規③) ～中略～ (a) 投手の軸足は一部（全部ではない）が投手板に触れていなければならない。 これはワインドアップポジションとセットポジションの両方に適用される。改正規則では、投手は、軸足の一部が投手板に触れている限り、投手板の端から離れて投球しても構わない。 ～中略～ 2020年の改正で、投手の投球姿勢に関する規則の中で、“投球に関連する動作”を“投球動作”に変更した。ワインドアップポジションにおいては、自由な足を一	打者への投球動作を起こす前に、投手が走者をアウトにとようと一連の動作で二塁（右投手の場合は三塁側に回り、左投手の場合は一塁側に回り）に（または右投手が三塁に、左投手が一塁に）振り向いて、踏み出して送球した。 一正規の動きである。（ただし、アマチュアでは、ボークとなる。）(5.07(a)(1)【原注2】②、アマチュア内規③) ～中略～ (a) 投手の軸足は一部（全部ではない）が投手板に触れていなければならない。 これはワインドアップポジションとセットポジションの両方に適用される。改正規則では、投手は、軸足の一部が投球動作の開始時に投手板に触れていればいる限り、投手板の端から離れて投球しても構わない。 ～中略～ 2020年の改正で、投手の投球姿勢に関する規則の中で、“投球に関連する動作”を“投球動作”に変更した。ワインドアップポジションにおいては、自由な足を一歩後ろに引いたり、ボディスイングを始めたりすることは、“投球動作”の開始であり、それらを伴わない肘から先を動かして両手を合わせる動作は、“投球に関連する動作”である。	2026 修正
---	---	----------------

	歩後ろに引いたり、ボディスイングを始めたりすることは、“投球動作”の開始であり、それらを伴わない肘から先を動かして両手を合わせる動作は、“投球に関連する動作”である。 また、セットポジションでは、ストレッチ（腕を頭上または身体の前方に伸ばす行為）は“投球に関連する動作”または“準備動作”とされている。これらは区別してかんがえなくてはならない。“投球に関連する動作”においては、途中で軸足を外すこともできるし、塁へ送球することも許される。“投球動作”を開始したら途中でやめたり、一時停止することは許されず、打者への投球を完了しなくてはならない。 これまで、規則書の中では“投球動作”と“投球に関連する動作”とを同じ意味で使っている個所があったので、今回の改正で明確に区別した。	また、セットポジションでは、ストレッチ（腕を頭上または身体の前方に伸ばす行為）は“投球に関連する動作”または“準備動作”とされており、“投球動作”とはいる。これらは区別して考えなくてはならない。 “準備動作”においては、途中で軸足を外すこともできるし、塁へ送球することも許される。“投球動作”を開始したら途中でやめたり、一時停止することは許されず、打者への投球を完了しなくてはならない。 OBRにおいては、これらの表記を全て“投球に関連する動作”として整理をしている。 公認野球規則においての投球にかかる動きについては、“準備動作”＋“投球動作”により行われ、これらを総じて“投球に関連する動作”（“投球に関連する動作”＝“準備動作”＋“投球動作”）とすることを2025年プロ・アマ審判部会において確認をした。これまで、規則書の中では“投球動作”と“投球に関連する動作”とを同じ意味で使っている個所があったので、今回の改正で明確に区別した。	
112	2 セットポジション	2 セットポジション 本文を次のとおり修正する。	2026 規則改正

	セットポジションから投球に際して、自由な足は、①投手板の真横に踏み出さない限り、前方ならどの方向に踏み出しても自由である。②ワインドアップポジションの投手のように、一步後方に引き、そして更に一步踏み出すことは許されない。(同【注4】) 投手は走者が塁にいるとき、セットポジションからでも、プレイの目的のためなら、自由に投手板をはずすことができる。この場合、軸足は必ず投手板の後方にはずさなければならず、側方または前方にはずすことは許されない。(同【注5】)	セットポジションから投球に際して、自由な足は、①投手板の真横に踏み出さない限り、前方ならどの方向に踏み出しても自由である。②ワインドアップポジションの投手のように、一步後方に引き、そして更に一步踏み出すことは許されない。(同【注3 ②4】) 投手は走者が塁にいるとき、セットポジションからでも、プレイの目的のためなら、自由に投手板をはずすことができる。この場合、軸足は必ず投手板の後方にはずさなければならず、側方または前方にはずすことは許されない。(同【注45】) 5.07(a)(2)②【原注】について、いわゆるハイブリッドポジションという投球動作が2026年から可能となった。 この投球動作については、規則としては2017年のOBR改正により載ったものだが、日本においては、様々な経緯があり、公認野球規則では採用していなかった。 しかし、世界標準となっている投球動作であるため、2026年の公認野球規則に載せることとした。 規則においては、投手が投手板に軸足を平行に触れ、なおかつ自由な足を投手板の前に置いた場合には、この投手はセットポジションで投球するとみなされるが、これを、“打者が打席に入る前に審判員に伝えた（申告した）場合は、ワインドアップポジションで投球することができる”としたもので、例えば2アウト走者3塁で、上記のような足の置き方をしてもワインドアップで投げることができるということをMLBの実状に即した形でOBRを整えたものである。 なお、このハイブリットポジションについては、塁に走者いるときにワインドアップポジションで投げるという投球動作であることから、けん制の動作についても正しく整理をしておく必要がある。	
123	12 先発投手および救援投手の義務	12 先発投手および救援投手の義務 本文をつぎのとおり修正する。	2026 修正

	しかし、MLB で準備投球を始めてから代打者が送られ、これによって投手が交代する事例が多く、試合の進行の妨げとなっていることから複数イニングとなった投手が「イニングの初めに準備投球を行った投手は、少なくともそのときの第1打者（またはその代打者）がアウトになるか一塁に達するため投球する義務がある。」との条文が追加された。	しかし、MLB で準備投球を始めてから代打者が送られ、これによって投手が交代する事例が多く、試合の進行の妨げとなっていることから複数イニングとなった投手が「イニングの初めに準備投球を行った投手は、少なくともそのときの第1打者（またはその代打者）がアウトになるか一塁に達するため投球する義務がある。」との条文が追加された。 この規則については、2025 年の規則改正において追加となったものだが、実際の MLB での取り扱いは、イニングの初めに”準備投球を行なった投手”ではなく、”ファウルラインを超えた投手”として適用されており、規則に謳われている内容と違っていたことが分かった。このことから、2026 年の規則改正において、実状に即した形で【注】を設け、”イニングの初めに準備投球を行なった投手を”を、”イニングの初めにファウルラインを超えてしまえば”と置き換えて適用することとした。	
124～ 128	13 監督、コーチがマウンドに行ける回数 監督またはコーチが投手のもと（マウンド）に行く制限について 1 監督またはコーチがファウルラインを超えて投手のもと（マウンド）に行った場合は必ず1回に数えられる規則である。 ただし、投手交代の場合を除く。 ～中略～ 4 球審（審判員）は、監督またはコーチに投手のもと（マウン	13 監督、コーチがマウンドに行ける回数 本文をつぎのとおり修正する。 監督またはコーチが投手のもと（マウンド）に行く制限について 1 監督またはコーチがファウルラインを超えて投手のもと（マウンド）に行った場合は必ず1回に数えられる規則である。 ただし、投手交代の場合を除く。 ～中略～ 4 球審（審判員）は、監督またはコーチに投手のもと（マウンド）へ行った回数を知らせる。 （2015 年 2 月 10 日アマチュア野球規則委員会通達） この規則については、2019 年の OBR 改正で「監督またはコーチが投手のもと（マウンド）に行った際、投手が他の守備位置に移ったかどうかに関係なく、そのイニングでその投手のもとへ一度行ったことになる」となっているが、我が国においては、監督が投手のもとに行ってから投手の交代を告げた場合は1回の	2026 修正

	ド) へ行った回数を知らせる。 (2015 年 2 月 10 日アマチュア野球規則委員会通達) なお、イニング初めに監督またはコーチがマウンドに行き新しく交代した投手を町 (1 回)、さらにその投手がウォームアップを始めてもマウンドに留まっていれば (1 回)、2 回となって・・・ ～以下省略～	トリップとしてカウントされるが、結果的にこの投手は退くため、実質的にその投手に対しての 2 回目は関係なくなる。このことから、「投手交代となった場合には数えない」との理解で公認野球規則への掲載はペンディングとなっていた。 その後、この規則については、監督またはコーチが投手のもとに行き、その投手は退かず他の守備位置に移動した場合、その投手は監督またはコーチが投手のもとへ 1 回行ったカウントを持ったまま他の守備に移ったことになり、再びその投手がマウンドに戻れば 1 回のトリップを保有した状態での登板となるケースを含んだ規則であることが確認できたことから、公認野球規則に載せることとなった。 従って、規則においては、『監督またはコーチが投手のもと (マウンド) に行った場合、投手の交代の有無を問わずトリップを 1 回カウントする』ことになる。 また、投手の交代と野手の入れ替えを球審に先に告げてから、監督またはコーチが投手のもとへ行ったとしても、投手に対してトリップをカウントするということになる。	
141	27 イリーガルピッチのペナルティはどの時点で適用するのか 2018 年の規則改正 (定義 38 の [注] の削除。前掲の「4 二段モーション参照」。) により、自由な足の一時停止や二段モーションなどは、走者がいない場合はペナルティがなくなった。したがって、イリーガルピッチは、定義 38 のとおり投手板に触れないで投げた投手と、クイックリターンピッチに限定された。(6.02(b)、定義 38)	27 イリーガルピッチのペナルティはどの時点で適用するのか 本文をつぎのとおり修正する。 2018 年の規則改正 (定義 38 の [注] の削除。前掲の「4 二段モーション参照」。) により、自由な足の一時停止や二段モーションなどは、走者がいない場合はペナルティがなくなった。したがって、イリーガルピッチは、定義 38 のとおり投手板に触れないで投げた投手と、クイックリターンピッチに限定された。(6.02(b)、定義 38)	

158～ 159	11 ファウルボールの進路を故意に狂わせた場合 フェア地域に入って来そうな打球を打者または走者が、・・・、これらはいずれも審判員の判断による。	11 ファウルボールの進路を故意に狂わせた場合 本文を次のとおり修正する。 フェア地域に入って来そうな打球を打者または走者が、故意に打球の進路を狂わせた場合は、打者または走者はアウトを宣告される。打球がそのままファウル地域を進みそうな場合には、ファウルボールとなる。これらはいずれも審判員の判断による。	2026 修正
161～ 166	14 打球が走者に触れる また、関連規則として、以下の3項目も2020年に改正された。 (1) 5.05(a)(4)の改正 5.05(a)(4)の末尾に()書きを追加する(本文には変更なし) 野手(投手を除く)を通過したか、または野手(投手を含む)に触れたフェアボールがフェア地域で審判委または走者に触れた場合。(走者については、6.01(a)(11)参照) (2) 5.09(b)(7)【注2】①②の改正 5.09(b)(7)【注2】の①の冒頭および②の全文を削除する。(点線部を削除) ①内野手を通過する前に、塁に触れて反転したフェアボールに、走者がフェア地域で触れた場合、その走者はアウトになり、ボールデ	14 打球が走者に触れる 本文一部を削除するとともに、次のとおり修正する。 また、関連規則として、以下の3項目も2020年に改正された。 (1) 5.05(a)(4)の改正 5.05(a)(4)の末尾に()書きを追加する(本文には変更なし) 野手(投手を除く)を通過したか、または野手(投手を含む)に触れたフェアボールがフェア地域で審判委または走者に触れた場合。(走者については、6.01(a)(11)参照) (2) 5.09(b)(7)【注2】①②の改正 5.09(b)(7)【注2】の①の冒頭および②の全文を削除する。(点線部を削除) ①内野手を通過する前に、塁に触れて反転したフェアボールに、走者がフェア地域で触れた場合、その走者はアウトになり、ボールデッドとなる。 ②内野手を通過した直後に、塁に触れて反転したフェアボールに、走者がその内野手の直後のフェア地域で触れた場合、この打球に対して他のいずれの内野手も守備する機会がなかった場合に限り、打球に触れたという理由でアウトにならない。 なお、5.09(b)(7)については、『走者がフェアボールにフェア地域で触れた場合にはアウトになる』という規定を、【注2】において「塁に触れて反転したフェアボールにフェア地域で触れればアウト」、【注3】において「塁に触れて反転したボールにファウル地域で触れた場合はアウトにならない」としてい	2026 規則改正

	ッドとなる。 ②内野手を通過した直後に、塁に触れて反転したフェアボールに、走者がその内野手の直後のフェア地域で触れた場合、この打球に対して他のいずれの内野手も守備する機会がなかった場合に限り、打球に触れたという理由でアウトにならない。	た。 しかし、世界標準では「塁に触れて反転したフェアボールがフェア地域、ファウル地域に関係なく走者に触れた場合はアウトになる」と運用されていることから2026年の規則改正において、「塁に触れて反転したフェアボールに走者が触れた場合、フェア地域またはファウル地域に関係なくその走者はアウトになり、ボールデッドとなる」とした。	
173	22 ベースコーチの肉体的援助 三星または一塁ベースコーチが、走者に触れるか、または支えるかして、走者の三星または一塁への帰塁、あるいはそれらの離塁を、肉体的に援助したと審判員が認めた場合、(守備の対象であった) 走者の守備妨害として、その走者にはアウトが宣告される。 (6.01(a)(8)) ベースコーチが、走者の帰塁または離塁を“肉体的 (physically)”に“援助 (assist)”したとは、どういうことか。 “肉体的 (physically)”とは、物理的に (実際に) ベースコーチ	22 ベースコーチのアシスト肉体的援助 本文を次のとおり修正する。 三星または一塁ベースコーチが、走者に触れるか、または支えるかして、走者の三星または一塁への帰塁、あるいはそれらの離塁を、アシスト肉体的に援助したと審判員が認めた場合、(守備の対象であった) 走者の守備妨害として、その走者にはアウトが宣告される。(6.01(a)(8)) ベースコーチが、走者の帰塁または離塁を“肉体的 (physically)”に“アシスト援助 (assist)”したとは、どういうことか。 “肉体的 (physically)”とは、物理的に (実際に) ベースコーチが走者の身体に触れることを言っていて、身体に触れない場合は“肉体的”に援助したとは言えない。 次に、“アシスト援助する (assist)”を考えたい。“アシスト援助する”とは	2026 修正

が走者の身体に触れることを言っていて、身体に触れない場合は“肉体的”に援助したとは言えない。 次に、“援助する (assist)”を考えたい。“援助する”とは“助ける”ことであり、ここでは走者が帰塁または離塁することを“助ける”ことである。つまり、ベースコーチと走者が接触しても、結果として走者の帰塁または離塁を“助ける”ことにならなければ、この規則は適用されないことになる。 塁に複数の走者がいる場合、1走者に対するベースコーチの肉体的援助があったとき、その走者に対して送球されるなど直接プレイが行われていた場合は、即ボールデッドとするが、直接プレイが行われていない場合には、即ボールデッドとするのではなく、全てのプレイが落ち着いてからタイムをかけ、その後に審判員は肉体的援助のあった走者をアウトにするなどして適切な処置をとる。ただし、ツーアウト後にベースコーチの肉体的援助があった場合には、即アウトにする。なお、即ボールデッ	“助ける”ことであり、ここでは走者が帰塁または離塁することを“助ける”ことである。つまり、ベースコーチと走者が接触しても、結果として走者の帰塁または離塁を“助ける”ことにならなければ、この規則は適用されないことになる。 塁に複数の走者がいる場合、1走者に対するベースコーチのアシスト肉体的援助があったとき、その走者に対して送球されるなど直接プレイが行われていた場合は、即ボールデッドとするが、直接プレイが行われていない場合には、即ボールデッドとするのではなく、全てのプレイが落ち着いてからタイムをかけ、その後に審判員はアシスト肉体的援助のあった走者をアウトにするなどして適切な処置をとる。ただし、ツーアウト後にベースコーチのアシスト肉体的援助があった場合には、即アウトにする。なお、即ボールデッドにしないケースでは、アンパイアリングとして、オブストラクション(2)項のように、アシスト肉体的援助があったことを示すために右手で小さくポイントしておくことが望ましい。	
---	---	--

ドにしないケースでは、アンパイアリングとして、オブストラクション(2)項のように、肉体的援助があったことを示すために右手で小さくポイントしておくことが望ましい。 例題1：打者が場外本塁打を打ち、三塁を回ったところで三塁ベースコーチとハイタッチしてから、本塁に進んだ。 —三塁ベースコーチは走者に触れたが、その走塁を“援助した”とは認められず、妨害は宣告されない。 例題2：1アウト、走者二塁で、打者がライト前ヒット。二塁走者は三塁をけて本塁に向かった。ライトは本塁に向けて送球した。三塁ベースコーチは、腕を回して進塁を指示していたが、勢い余って走者が向かってきたので避けようとしたが間に合わず、走者と接触した。走者は進塁をあきらめ、三塁に戻った。 ①審判員が、三塁ベースコーチは走塁を“<u>援助していない</u>”と判断	例題1：打者が場外本塁打を打ち、三塁を回ったところで三塁ベースコーチとハイタッチしてから、本塁に進んだ。 —三塁ベースコーチは走者に触れたが、その走塁を“アシスト援助した”とは認められず、妨害は宣告されない。 例題2：1アウト、走者二塁で、打者がライト前ヒット。二塁走者は三塁をけて本塁に向かった。ライトは本塁に向けて送球した。三塁ベースコーチは、腕を回して進塁を指示していたが、勢い余って走者が向かってきたので避けようとしたが間に合わず、走者と接触した。走者は進塁をあきらめ、三塁に戻った。 ①審判員が、三塁ベースコーチは走塁を“アシスト援助していない”と判断した場合 ・妨害は宣告されず、ボールインプレイの状態は続く。この場合、審判員は“ナッシング”のジェスチャーをする。 ②審判員が、三塁ベースコーチは走塁を“アシスト援助した”と判断した場合 ・ボールデッドとして二塁走者にアウトを宣告する。打者走者は妨害発生の瞬間の占有塁に留め置く。なお、走者が三塁ベースコーチと接触した後に本塁に向っても、同じ対応となる。 例題3：走者三塁で、打者が一塁ゴロを打った。一塁手は本塁に送球し、三・本間でランダウンが始まった。打者は一塁側が一塁ベースを踏んだ、したがって自分はアウトだと思って、走るのを止めたが、一塁ベースコーチが、その打者走者	
--	---	--

した場合 ・妨害は宣告されず、ボールインプレイの状態は続く。この場合、審判員は“ナッシング”のジェスチャーをする。 ②審判員が、三塁ベースコーチは走塁を“<u>援助した</u>”と判断した場合 ・ボールデッドとして二塁走者にアウトを宣告する。打者走者は妨害発生の瞬間の占有塁に留め置く。なお、走者が三塁ベースコーチと接触した後に本塁に向っても、同じ対応となる。 例題3：走者三塁で、打者が一塁ゴロを打った。一塁手は本塁に送球し、三・本間でランダウンが始まった。打者は一塁側が一塁ベースを踏んだ、したがって自分はアウトだと思って、走るのを止めたが、一塁ベースコーチが、その打者走者を押して一塁に触れさせた。 —このケースは、肉体的援助があった打者走者に対して直接プレイが行われていないので、即ボールデッドにするのではなく、三・本	を押して一塁に触れさせた。 —このケースは、アシスト肉体的援助があった打者走者に対して直接プレイが行われていないので、即ボールデッドにするのではなく、三・本間でのランダウンプレイが落ち着いてから、審判員はタイムをかけ、アシスト肉体的援助のあった打者走者をアウトにする。 例題4：ノーアウト走者二塁。打者レフト前ヒット。二塁走者が三塁を回ったところで三塁ベースコーチのアシスト肉体的援助があった。レフトからの送球は、7-2-4と渡って、打者走者を二塁でアウトにしようとした。 —この場合、二塁走者に直接プレイが行われていたのか、あるいはそうではなく、プレイを流してしまうのか（つまり打者走者に対する二塁でのアウトまたはセーフのプレイを生かす）といった議論がある。しかし、事例のように、送球が走者の方に向かってきていたとすれば、その走者に対して直接プレイが行われていたと解するのが妥当と考える。 したがって、このケースは即ボールデッドとなって二塁走者はアウト、打者走者は一塁に戻るとするのが正しい処置となる。 一方、走者二塁。打者がレフト前ヒットを打った。二塁走者が三塁を回ったところで三塁ベースコーチのアシスト肉体的援助があった。レフトは本塁にではなく、打者走者をアウトにしようと二塁に送球した場合、打者走者は二塁でアウトになるかセーフになるか、そのままプレイを流す。プレイが落ち着いた後に、タイムをかけ、二塁走者にアシスト肉体的援助でアウトを宣告する。	
---	---	--

	間でのランダウンプレイが落ちてから、審判員はタイムをかけ、肉体的援助のあった打者走者をアウトにする。 例題4：ノーアウト走者二塁。打者レフト前ヒット。二塁走者が三塁を回ったところで三塁ベースコーチの肉体的援助があった。レフトからの送球は、7-2-4と渡って、打者走者を二塁でアウトにしようとした。 —この場合、二塁走者に直接プレイが行われていたのか、あるいはそうではなく、プレイを流してしまうのか（つまり打者走者に対する二塁でのアウトまたはセーフのプレイを生かす）といった議論がある。しかし、事例のように、送球が走者の方に向かってきていたとすれば、その走者に対して直接プレイが行われていたと解するのが妥当と考える。 したがって、このケースは即ボールデッドとなって二塁走者はアウト、打者走者は一塁に戻るというのが正しい処置となる。 一方、走者二塁。打者がレフト		
--	--	--	--

	前ヒットを打った。二塁走者が三塁を回ったところで三塁ベースコーチの肉体的援助があった。レフトは本塁にではなく、打者走者をアウトにしようと二塁に送球した場合、打者走者は二塁でアウトになるかセーフになるか、そのままプレイを流す。プレイが落ち着いた後に、タイムをかけ、二塁走者に肉体的援助でアウトを宣告する。		
175	23 ベースコーチ以外の肉体的援助 ベースコーチ以外の者が、走者に肉体的援助（後位の走者が前位の走者をつかんだり、向きを変えたり、次打者が本塁を踏み損ねた走者を押したりなど）をおこなった場合は？ ―” 追い越し” をしないように後位の走者が前位の走者の背中を押したり、また次打者が本塁を踏み損ねた（？）走者をもう一度踏みなおすよう押し戻したりなどの肉体的援助を行うことは差し支えない。ただし、ダッグアウトに入っ	23 ベースコーチ以外の肉体的援助 本文を次のとおり修正する。 ベースコーチ以外の者が、走者にアシスト肉体的援助（後位の走者が前位の走者をつかんだり、向きを変えたり、次打者が本塁を踏み損ねた走者を押したりなど）をおこなった場合は？ ―” 追い越し” をしないように後位の走者が前位の走者の背中を押したり、また次打者が本塁を踏み損ねた（？）走者をもう一度踏みなおすよう押し戻したりなどのアシスト肉体的援助を行うことは差し支えない。ただし、ダッグアウトに入ってしまうと、もう（本）塁の踏み直しには戻れない。 (5.09(c)(2) [規則説明] (B))	2026 修正

	てしまえば、もう（本）塁の踏み直しには戻れない。 (5.09(c)(2) [規則説明] (B))		
193	2 最終回の裏、満塁で四球 打者走者または三塁走者が進塁に際して塁に触れ損ねた場合も、適宜な時間が経っても触れようとしなかったときに限って、審判員は、守備側のアピールを待つことなく、アウトの宣告を下す。 (5.08(b) [原注] [注])	2 最終回の裏、満塁で四球 本文をつぎのとおり修正する。 打者走者または三塁走者が進塁に際して塁に触れ損ねた場合は、 も、適宜な時間が経っても触れようとしなかったときに限って、 審判員は、守備側のアピールがあったときだけ待つことなく、アウトの宣告を下す。(5.08(b) [原注] [注])	2026 規則改正